

の競食が崇つて、今日は大に元氣が無い、食事も進まぬらしく、苦い顔をしてござらツした。

一時間程して一同は四望頂を出發、東の石門をくぐつて神懸焼を見物し、それから大急ぎの漸く只今歸着したのだとブック氏は息をもつがず語られた。

セイヌ河畔

T O 生

巴里のセイヌ河は、丁度東京の隅田川大阪の淀川のやうなもので市の中央を流るゝ大きな川である。川には一錢蒸氣が盛んに動いてゐる、また下等の風呂船などもある。橋では博覽會紀念に架せられた歴山三世橋が廣くつて立派である。上流は紳士の別荘などがあつて景色のよい處が多い。

川上に向つて右は巴里の繁華な大通りで有名なオペラも遠くはない、凱旋門も直ぐ近くである。歴山三世橋の袂には、大サロンの會場なるグランパレーがある。市で買上た美術品の陳列場たるピツチパレーもある。少し下るとルーブル博物館が岸に臨むて嚴として、控へてゐる。それより猶下ると市廳がある、この壁畫は大したものだ。ノートルダムは、下流の島のやうな處に高く中空を摩してゐる。左岸はナポレオンの墓所やエッフェル塔などあつて、丁度ルーブルの對岸あたりに美術學校がある、世界の美術家はこゝに種を撒き發育するので、實も生らずに枯れてしまふのも少なからぬことだらう。口繪にある河岸店は、美術學校の在る近處、セイヌ河の岸堤防用の石垣の上に並ん

であるさまの店で、大きな箱の中に商品がある。黒い着物の女や白い髯の男が番をしてゐる。古錢もある、小道具もある、併し重に書物で、古いカタログなどよく日に晒されて表紙を反らしてゐる。香氣な巴里人は勿論遊覽の外國人も皆足をとめる。中村不折君は、留學中は學校の往復には屹度立寄つて、掘出物がなにかと目を皿にしたものだ。

床店は夜になると箱の蓋をして錠を下し、番人はテンの家の歸つてしまふ。

床店の並むでゐる石垣の後ろは海岸になつてゐて、一間程の道がある、人があまり通らぬから川や橋の寫生にはよい處である。先年三宅克己君がこゝで寫生してゐたら、石垣の上から紙屑など投つて困るので日除傘をさした、するとイタヅラ小僧が、上から傘の石突を掴むて宙に吊したといふ話もある。

寫生地案内

三 脚 子

東京を中心として、一日で往ける位ゐる場處の寫生地を、毎號御案内いたさう

冬は自然界の活動の休む時であつて色彩の變化が少なく、又東海道方面は好晴の日が續くから、五日一週間と一つの繪の寫生をなすのに都合がよい。たゞ此季節に於て、戶外寫生に困難を感じるのは、寒氣と強風とである。

冬の日の感じは、弱いけれど落ツキがあつて、穩やかな繪が出来る。寫生地としては何處でも面白く、雪の景などは此季節に

限られてゐる、併し一月のことであるから暖かな處をまづ紹介しやう。

一月の寫生地としては、伊豆方面が一番よい様に思ふ。伊豆は天城手前もよく、天城を越へてもよい。東海道鐵道三島驛で大仁行に乗換へる、此間には遠く白峯も見え富士も見えて景色の面白い處もある。大仁驛近くでは、修善寺温泉が畫境に富むてゐる、氣候も大して寒くはなく、風も強くはない、桂川の流れに沿ふてゆけば、小さなスケッチ場處はいくらでもある。

修善寺の先に吉奈といふ温泉場がある。こゝは四方の山も低く、平凡で、且、水が乏しいから、氣に入つた場所は見出せない。

私の紹介したのは、それよりまだ先の湯ヶ島で、こゝも温泉場ではあるが、風俗も修善寺あたりよりよく、質素で吾々の滞在に適する。天城山麓で、あまり風は吹かない。南伊豆のやうに暖かではないが、手袋襟巻なしで夕方迄戶外寫生は出来る。材題は、まづ第一に目につくのは、黄に輝やく枯草山で、次は狩野川の溪谷の水である。枯草山は往々高原を成してゐて、富士を遠望に、廣濶雄大な景を見る、また一里程上れば海も見えて、一層壯大の觀がある。

是等の草山には、所々草の塚があつて、中心の棒は高く、三三五々風情をなし、西日をうけた影など、特に面白い。川には大小の岩もある。激流も緩流もある。落葉樹の林、常磐木の森もある。風致あつた竹藪も、趣多き農家もある。温泉宿の立並ぶ中を、高く架つてゐる橋も畫中のもので、道路山水も二三枚は出

來やう。

暖かい處だけに、椿は紅みに到る處目につく。下流五六丁をゆくと、景色が廣くなつて、田甫の枯草など、好畫題に數へることが出来るやう。天城山さして上ければ、途中淨蓮の瀧がある、形のよい瀧で、冬見ても悪くはない。山麓の平原は、處々杉の森があり枯野の一筋道を馬や牛が通つてゐる。

湯ヶ島から二里、天城山中には八丁池といふのがあつて、冬は一面に結氷で閉ぢられてゐるが、其光景も中々面白い。

湯ヶ島には宿屋が澤山ある。瀬古の湯の方へゆけば、僅かな費用で滞留することが出来るやう。落合樓、湯本屋などいふ、此地一流の家でも、一日六七十錢で居られる。

△ △ △

非力の者が強力の敵に向ふに、己れの身を全ふして其敵に勝たうと思ふのは無理だ。此際自分の身も殺される氣で、敵を斃す決心、即ち死身になつて掛れば、必ず其敵を斃し得べく、また自分の身に害を受けない事もあらう。

繪でも同様だ、自分の技倆に及ばないやうなものも、時として試みなければ進歩しないが、このやうな場合、その繪を立派に畫き上げやうなど思ふと却而失敗する、それよりも、繪はどうなつてもよい、飽迄目的物の眞を捉えやうとの決心でやつたら、何物か得る處があつて、時としては其繪も立派なものになるかも知れない。